龜井勝一郎全集

補巻一

講談社

亀井勝一郎全集　補巻一

昭和四十八年四月十六日　第一刷発行

定価　一五〇〇円

著者　亀井勝一郎

発行者　野間省一

発行所　東京都文京区音羽二―一二―二一
株式会社　講談社
郵便番号　一一二
電話　東京〇三(945)一一一一(大代表)
振替　東京三九三〇

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　大製株式会社

落丁本・乱丁本は
お取り替えいたします。
©鎮井愛子　昭和四十八年

Printed in Japan

0395-135223-2253 (0)　(文1)

龜井勝一郎全集　補巻一

編纂

河上徹太郎

中村光夫

丹羽文雄

山本健吉

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

補巻一　目次

解説

岡本かの子　鶴は病みき……一三
三代名作全集　島崎藤村集……一四
武者小路実篤　友情……一六
井伏鱒二　山椒魚……一九
石川達三　日蔭の村……二三
岡本かの子　河明り・雛妓……二六
井伏鱒二　丹下氏邸……三〇
島木健作全集第八巻……三二
石川達三　望みなきに非ず……三五
岡本かの子　巴里祭……三九
石川達三　転落の詩集……四二
倉田百三　出家とその弟子……四六
太宰治の宿命……五〇
岡本かの子　母子叙情……五六
内村鑑三……五九
岡本かの子　老妓抄……六三
この期間の傾向……六七
島木健作全集第十四巻……六九
井伏鱒二集……七二
あとがき　文芸評論代表選集……七八
石川達三　結婚の生態……七九
太宰治　ヴィヨンの妻……八三
小林秀雄全集第六巻……八六
文壇の概観　文芸年鑑……九〇
武者小路実篤　愛慾・人間万歳……九三
森鷗外　青年・あそび……九五
武者小路実篤　愛と死……九七
舟橋聖一　雪夫人絵図……一〇二

串田孫一　哲学と人間……一〇四
河上徹太郎　新聖書講義……一〇六
日本文学大辞典　別巻……一一〇
岡倉天心……一一〇
井伏鱒二……一一一
島木健作……一一三
巡　礼……一一三
生々流転……一一三
昭和の思想家……一一四
昭和のベストセラー小説……一一六
多甚古村……一一九
茶の本……一二〇
東方の門……一二一
東洋の理想……一二一
日本の覚醒……一二二
日本浪曼派……一二三
藤沢桓夫……一二四
舟橋聖一……一二四
文明批評……一二五
木　石……一二六
夜明け前……一二六
夜ふけと梅の花……一三一
老妓抄……一三一
武者小路実篤　真理先生……一三二
武者小路実篤詩集……一三五
倉田百三選集第四巻……一三七
武者小路実篤集……一四〇
青野季吉選集1……一四三
青野季吉選集2……一四六
青野季吉選集3……一四八
本庄陸男　石狩川……一五一
倉田百三選集第一巻……一五五
志賀直哉　武者小路実篤集……一五八
島木健作集……一六〇
石川達三　中山義秀集……一六四
島崎藤村……一七一
倉田百三集……一七八
島崎藤村集……一八二

火野葦平　花と龍……一九一
夏目漱石全集第三巻……一九四
夏目漱石全集第七巻……二〇〇
武者小路実篤　人生論……二〇三
林房雄　青年……二〇六
武者小路実篤論……二〇七
小山清　落穂拾ひ・聖アンデルセン……二一一
武者小路実篤　維摩経……二一三
井上靖　青衣の人……二一六
内村鑑三　後世への最大遺物・デンマルク国の話……二一九
内村鑑三　宗教と文学……二二二
武者小路実篤　絵と彫刻について……二二六
作品の解説……二四〇
高橋新吉覚書（解説に代へて）……二四四
祈りの文学……二四八
椎名麟三作品集第六巻……二五二
高見順　都に夜のある如く……二五六
武者小路文学について……二五九
文学者とその視野……二六九
国民詩集……二七二
井上靖　あすなろ物語……二七三
詩論について……二七七
久生十蘭　母子像・鈴木主水……二七八
前川佐美雄歌集……二八二
太宰治集……二八七
漱石の一生とその作品……二九五
舟橋聖一集……三一一
丹羽文雄集……三一六
石坂洋次郎集……三二四
丹羽文雄　蛇と鳩……三二九
太宰治集……三三三
井上靖　田宮虎彦集……三四一
武者小路実篤のおひたちとその作品……三四九
井上靖　楼蘭・蒼き狼……三六三
丹羽文雄　火野葦平集……三六八
太宰治　愛と苦悩の手紙……三七七
室生犀星　杏つ子……三八〇

武者小路実篤集……三八四
高村光太郎　宮沢賢治集……三九一
島崎藤村集(一)……四〇一
岡本かの子集……四〇九
内村鑑三——近代日本精神史におけるその
位置と特徴——……四一五
石川啄木集……四四二
内村鑑三集　附キリスト教文学……四五〇
人と文学　丹羽文雄集……四六八
内村鑑三と正宗白鳥……四七四
宇野千代　岡本かの子集……四九〇
石坂洋次郎文庫3……四九八
武者小路実篤集……五〇一
武者小路実篤伝……五〇七

序跋・推薦文

友情のために　赤木健介第一詩集　明日……五一九
後記　光をたづねて　岡本かの子……五二〇
後記　倉田百三評伝……五二一
明治最後の仏教徒　高嶋米峰自叙伝……五二三
跋　純粋の探求　佐古純一郎……五二四
解説　桃中軒雲右衛門　井上友一郎……五二五
あとがき　愛と死の思索……五二七
後記　若い人々のための恋愛論……五二八
あとがき　武者小路実篤　日本文学アル
バム……五二八
あとがき　平和の探求……五二九
序文　桜島の見える窓　川崎清……五三一
あとがき　若い河……五三二
解説　北斎　織田一磨……五三三

あとがき　恋愛と結婚……五三六
後記　現代国民文学全集十八……五三七
はじめに　夏目漱石名作集……五四〇
監修の辞　歴史の旅……五四一
この物語を読む前に　ピノッキオ……五四二
監修の辞　続歴史の旅……五四三
監修の辞　歴史を訪ねて……五四四
監修のことば　日本名言集……五四五
まへがき　古都……五四六
開拓者精神　北海道歴史散歩……五四八
後記　西の京唐招提寺……五五〇
監修の辞　続歴史を訪ねて……五五一
古都と伝統の美しさ　京都……五五二
民族の魂のふるさと　奈良……五五四
あとがき　内村鑑三……五五六
あとがき　平城宮……五五七
美への誘ひ……五五八
後記　西の京薬師寺……五六二
友誼長青（跋文）　鑑真和上……五六三
「市長日誌」に寄せて　島野武……五六七
編集の辞　歴史の旅1……五六八
編集の辞　歴史の旅2……五六九
感想　魯迅伝　小田嶽夫……五七〇
序　わが罪障　小寺雄造……五七二
高村光太郎選集……五七三
若き日の思索のために　串田孫一……五七三
読書の伴侶　久山康……五七三
青春の泉　ゲーテ作品集……五七四
棘のある軽み　井伏鱒二作品集……五七四
庶民の美しさ　落穂拾ひ……五七五
数学の影絵　吉田洋一……五七五
「水面」によせて　長沢美津……五七六
本書について　私の詩と真実　河上徹太郎……五七七
「終身未決囚」を読んで　有馬頼義……五七七
折口先生の偉業　折口信夫全集……五七七
漱石の文学における人間の運命　佐古純一郎　五七八
推薦の言葉　小林秀雄全集……五七八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「青粧」を読んで　生方たつゑ……五七九
家庭小説の傑作　子供の眼　佐多稲子……五七九
東洋の詩魂　蔵原伸二郎……五八〇
実践のための指針　茶道辞典……五八〇
「三人姉妹」をみて……五八〇
推薦の言葉　高村光太郎全集……五八一
万人のための詩書　現代詩の魅力　桜井勝美　五八一
会田綱雄氏「鹹湖」を推す……五八二
読後感　高村光太郎　その詩と生涯　伊藤信吉　五八二
推薦のことば　大和路　入江泰吉写真集……五八三
詩人と学究　会津八一全集……五八三
推せんのことば……五八四
読後の感想　かげろふの日記遺文　室生犀星　五八四
ゲーテ全集……五八四
少年少女物語日本歴史　桑田忠親……五八五
凡夫の祈りの文学　外村繁全集……五八五
考える女性の生き方　進藤純孝……五八五
藤かゞみ　松原一枝……五八五
逆流の中の歌　伊藤信吉……五八六
愛と死をみつめて　河野実　大島みち子……五八六
闘鶏絵図　宮地佐一郎……五八六
「古典と美」に寄せて　小林秀雄……五八七
審査報告……五八七
二つの期待　古在由重著作集……五八八
高村光太郎全詩集……五八八
原色日本の美術……五八九
近代日本の運命を考へた詩人　島崎藤村全集　五八九
武者小路実篤人生論集……五九〇
優美なる幸福……五九一
解題……五九二

解

説

解説　岡本かの子　鶴は病みき

生命の河のほとりに、ひとりの美的生物学者が立つてゐる。彼はこの河を流れる諸々の生物をつかみあげ、その瞳、容貌、体質、体臭等、要するにすべての相を、惨酷なほど狂はしい情熱で解析してみせる。或るときは森厳な哲人のやうに犀利な判定を与へ、他方では幼児が玩具を弄ぶときのやうな無心の愛情を注いでゐる。そして生命の美しさ、激しさ、いとしさに身を悶えながら、遂には自ら生命の大河の犠牲となるのだ。岡本かの子氏の胸を貫くものは、この大きいいのちの奔流であつた。

社会に生起する様々の事件や人の動きをとほして、氏の直截にとらへようとしたのは生命である。所謂心理とか思想とかイデオロギー等によつて色あげすることなく、一切の外的粉飾を峻拒して、もつと生々しいものの根源に在るもの、いのちの不可思議に参じようとした。かゝる意向の背後には、仏教に関する長い間の研鑽も大きく作用してゐたと思ふ。大乗の教から氏の作品を解くだけの力は私にはないが、全労作にふれて行くならば、仏法の核心としてかの子氏が何をみ、何を求めたか、次第に感得することが出来るであらう。善悪の彼岸に生命の元つ泉がある。その泉の傍で、水浴する童女の、無心な戯れと、煩悩深き女人の、切な祈りの姿を同時にみることが出来るであらう。

かの子氏にとつて解脱は、単純に清浄身たることではなかつた。仏性は清きもののみを意味しない。清も濁もすべてを含めた在るがまゝのいのち、のつぴきならぬその流転の激しさにわが身を捨てんとしたのだ。人間も植物も動物も石塊も、かの子氏の心には一なるいのちとして映つてゐたやうである。一切衆生悉く仏性ありといふ大乗の根本命題は、氏によつて深い美学に転化されたといへる。「花は勁し」の中の言葉――「たとへ小米の花の一輪にだに全樹草の性格なり荷担の生命を表現してゐる。地中のあらゆる汚穢を悉く自己に資する摂取とし、地上陽下に燦たる香彩を開く、その逞しき生命力。花は勁し」を想へ。一切衆生の裡に同じ原理を認め、開花において仏性の美を讃へたのである。しかしそれは悟達者の静かな讃歌ではなかつた。

東洋と西欧の教養を一身に融和させ、あふるるやうな生命力をもつて氏は燃焼した。氏の小説は、自分の生命をもてあましたところから来る一種の自己虐使だつたとも考へられよ

う。屢〻異常なものへの、病的にすらみえる執着となつてあらはれてゐる。「鶴は病みき」「金魚撩乱」「春」「花は勁し」「落城後の女」は、それぞれの面で作者の異常な嗜好を語つてゐる。

「鶴は病みき」は、芥川龍之介がモデルであることは明かだが、さういふ問題を離れて、この作品は、かの子氏の生命凝視の眼の鋭敏を示してゐる。或る時期の高名な文人に対し、氏は尊敬と幾分のためらひをもつて接したらしい。気持も筆致も奔放自在とまでは行つてゐない。しかし、病み衰へるいのちの奇しき光りをみるや否や、氏は大胆不敵な把握力をもつて――一種異様な好奇心を働かせつゝ貪婪に迫つて行く。「花は勁し」における肺病の画家に対する態度、「春」における狂女への執心、「落城後の女」における没落の娘たちへの切な情熱、すべて共通したものではなからうか。死に近く立つ人間、病み弱まつた古い血統、さういふところに妖麗に燃えたつ生命をかの子氏は抱擁するのだ。花ならば、自然にさいなまれ人工に翻弄された狂ひ咲――かゝるものへの激情である。「花は勁し」の生花師匠や、「金魚撩乱」の金魚つくり等に、かの子の氏夢みた激しい生き方を偲ぶことが出来る。そしてかの子そ氏の人が、大きい美しい狂ひ咲であつたと、全篇を読み終つた人は深い嘆息をもつて感得するだらう。

解説　三代名作全集　島崎藤村集

この集の作品はすべて大正期に成り、これを年代順に編んだもの。著者の生涯にとり思ひ出深き一時期の記念であるといふ。

いま年譜によつてみるに、藤村氏が仏蘭西の旅から帰つたのは大正五年である。それから大正八年までの間に、「故国に帰りて」「海へ」等の紀行をかき、「桜の実の熟する時」を完成、童話集「幼きものに」を上梓、つゞいて「新生」（後に「寝覚」と改題）第一部二部をかきあげてゐる。この集のはじめにある「貧しき理学士」はその翌年、即ち大正九年の作であり、「分配」は昭和二年に執筆されたから、正しくは大正後半期の作品がこゝにをさめられてゐるわけである。藤村氏自らの編纂に成る定本版「藤村文庫」では、「春待つ宿」の部分にあたる。

「春待つ宿」の序と附記に、この時期がどういふ意味で自分の生涯にとつて思ひ出深きときだつたかを、自ら語り且つ作

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com